

中山道を歩こう会

(上尾～北本)



もう 9 月になりますがまだまだ暑いです。上尾駅をスタートして上尾宿から桶川宿にそして北本駅までを歩きます。熱中症に気をつけながら無理せず行きましょう。

記

■日 時：平成 28 年 9 月 8 日 (木) 8 時 35 分集合

■集合場所：新秋津駅 改札外

(東所沢駅から 8:44 発むさしの号後の車両に乗車下さい)

■見学場所及び時間：コース全長約 10km

新秋津駅(8:41 発 むさしの号大宮行)⇒上尾駅 (9:20)

⇒上尾宿：遍照院－西の木戸跡⇒小休止：ふれあいの森

⇒紅花問屋須田家⇒昼食 (とんでん) ⇒桶川宿 (竹村旅館、蔵造りの商家、本陣等) ⇒中山道宿場館⇒多聞寺・天神社

⇒北本駅…南浦和経由 所沢 (17:30 頃帰着予定)

■交通費 (所沢から)：約 1,640 円

■昼食 和食レストランとんでん 11:30～12:30 ☎048-775-8801

■散策先簡単ガイド

<遍照 (へんじょう) 院>

遍照院は、江戸時代には寺領 20 石の朱印地を与えられた大寺です。市内には幕府から御朱印を与えられた寺院は多いが、20 石は最高の石高です。

室町時代の創建で日乗山秀善寺遍照院と号し、本尊は大聖不動明王で「上尾身代わり拭い不動尊」と言われています。

天保 9(1838)年の村絵図では、同寺は



広大な境内地を持ち、参道は旧中山道から山門に直進する形で描かれている。遍照院門前には多くの商家があり、中には当時から現在なお営業している豆腐店などもあると『上尾市史』第3巻に書かれています。20年前に編纂されたものなので今営業しているかは不明、Google マップでは見つかりませんでした。

孝女お玉の墓：お玉は越後の貧農の家に生まれ、家を助けるため11歳のときに上尾宿の大村楼に身売りされました。美しく気立てよく、評判の遊女となったお玉は、19歳の時、参勤交代で上尾を訪れた加賀前田家の小姓に見初められ、めでたくも江戸行きとなりました。ところが、2年ばかりで病気になり、上尾に戻されてしまいます。お玉はそれでも、生家を支えるために懸命に働き続けましたが、25歳の若さでこの世を去りました。大村楼の主人は、お玉の孝心に心を打たれ、手厚く葬ったとされています。

<上町の庚申塔>

上尾上町講中が延享2年(1745)に建てた庚申塔があります。写真を見るとなんかショケラを持っている様にも見えます。現地で、見てみましょう。



<上尾宿西の木戸跡>

西の木戸があった所には現在は上尾宿の案内板が立っています。

この案内板の屋根に上尾宿に独特の鍾馗様が乗っています。(まだ、鍾馗様を見ていない方は、前回の資料を参照して下さい。)



<武州紅花問屋須田家>

紅花は江戸時代になると商品作物として各地で栽培されるようになりました。当時全国生産の大半を占めたのは最上地方(山形)でした。江戸の商人が最上産の紅花の種を与えて栽培させたのが上尾周辺での紅花生産のはじめと言われており、次第に桶川、上尾、大宮、浦和最寄りの村々で盛

んに作られるようになりました。

幕末には入間・高麗地方にまで広がり、最上に次ぐ生産量を占めるまでに至りました。黒板塀は仲買商だった須田家の建物です。

<昼食：とんでん桶川店>

048-775-8801 11:30～12:30 予定

<桶川宿>

参勤交代が確立した頃に桶川宿が成立しました。宿場開設当時(寛永14年：1637)には戸数わずか58軒でしたが、「中山道もの」といわれた紅花等の染料や食用農作物の集散地となり、天保14年

(1843)には347軒に達し、経済的にも文化的にも繁栄を見せています。

岐阻街道 桶川宿 曠原之景



桶川宿は江戸に向かう旅人の最後の宿泊となる事が多かった宿場といえます。江戸まで約10里なので、昔の人なら10時間歩けば着いちゃうんですね。

皇女和宮の下向の際は桶川宿の本陣到着は午後2時、出発は午前2時。早暁の出で立ちで板橋宿に向かいました。暗い内に出て明るい内に終わるのが通常だったようですが和宮でも午前2時出発とは驚きです。

桶川宿の入り口の木戸：桶川宿の町並みの両端には、宿場の出入口として木戸が設けられていました。下の木戸は上尾寄りに、上の木戸は京に近い鴻巣寄りに設けられ、朝夕定時に開閉されていたといえます。現在は、木戸の場所を当時の絵図から推測し、木戸跡に石碑が建てられています。



鍾馗様：藤倉家は建て直されていますが鍾馗様だけは残って屋根の上にあります。見えるかな？

伊勢茂：秋山ビルはかつてここに、紅花商人としても知られた「伊勢茂」を屋号とする穀物問屋がありました。伊勢茂の主は代々「茂右衛門」を名

のり、幕末の茂右衛門は旅を好み、庶民の旅の様子を伝える旅日記を残しています。

<武村旅館>：江戸時代末期の天保年間には36軒あった旅籠の内の一つ紙屋半兵衛の旅籠が現役の旅籠の竹村旅館です。大正時代に改築されたが当時の間取りは現在もほぼ引き継がれています。

皇女和宮が本陣に泊まったとき、付き添いの山岡鉄舟はここに泊まっており、自筆の宿帳が残っています。

<浄念寺>桶川宿の下の寺と呼ばれるこの寺は、戦国時代に当たる天文15年(1546)に開かれた浄土宗の寺院です。門の鐘は、桶川宿の「時の鐘」であったと伝えられています。また、境内には「不動堂」「太子堂」「徳本念仏供養塔」など、宿場の人々の暮らしを伝えるものが数多く伝えられています。

<島村家住宅、土蔵>天保7年(1836)の建築と伝えられ、桁行6間、梁間3間の総3階建ての土蔵で、市内に現存する古い建物です。

島村家は、桶川宿場内の穀物問屋で、屋根の両端にある鬼板には、屋号の木嶋屋の「木」の字が刻まれています。この土蔵の建設工事は、天保の飢餓に苦しむ人々に仕事を与え、多くの民を飢えから救ったことから「お助け蔵」と言われたと言い伝えられています。

<旅籠 小林家>小林家住宅は、江戸時代の終わりから明治の初めにかけて建てられた建造物とされています。文久元年(1861)の和宮御下向の割書上には吉右衛門の名が記されており、その「吉」の名は主屋の鬼板に刻まれています。現



在の内部は多くの部分が改修されていますが、外部には旅籠の面影がうかがい知れます。

<蔵造りの商家 矢部家>矢部家は、木半の屋号で知られた穀物問屋で、江戸時代に紅花商人としても活躍していました。矢部家は、土蔵造りの「店蔵」とその奥へ続く「住居部」と「文庫蔵」で構成されます。店蔵は明治38年に建てられ、棟札には、川越の「亀屋」建築に係わりの深い大工や左官の他、地元の大工、鳶、石工らが名を連ねています。桶川の歴史を物語る桶川宿の「顔」ともいべき立派な建物です。



<桶川宿本陣遺構>本陣は代々府川家が勤めました。敷地は千坪あまりで建坪も二百坪に達していました。瓦葺・切妻建物の一部（上段の間・次の間・湯殿）が現存しているが、一般には公開されていません。

桶川宿本陣は加賀百万石の前田家の宿所とされたほか、水戸藩主徳川斉昭（15代将軍慶喜の父）も利用したとされています。また、文久元年（1861）には江戸に向かう皇女和宮が宿泊したことで知られています。

<中山道宿場館>桶川市の宿場情報や市内の史跡・観光情報の案内や日本橋から大宮宿、桶川宿、埼玉県内の最後の宿場本庄宿まで、地図を用いて紹介している。

<稲荷神社>桶川宿周辺で紅花を扱っていた商人たちが、安政4年（1857）に南蔵院不動堂へ寄進されたとされる2基の石燈籠が拝殿前に今も残る。（明治2年に現在地へ移設したもの）また、拝殿前には、長さ1.25m、幅0.76m、重さ610Kg、日本一の力石があり、江戸一番の力持ちと評判の力士三ノ宮卯之助がこれを持ち上げたと伝えられています。



<大雲寺>桶川宿の上の寺と呼ばれたこの寺は曹洞宗龍谷山大雲寺で、弘治3年（1557）の開山と伝わる。墓地には本陣を勤めた府川家や宿場縁故

の家々の墓がある。本堂に向って左に3体の地蔵があり、右端が「**女郎買い地蔵**」である。この地蔵は、毎夜女郎買いに出かけるので住職が背中に鍔をうち鎖で縛ったとの伝説が残されている。背中には鍔のあとが残っています。これは和尚が寺の小僧の夜遊びを戒めるためであったらしい。

＜一里塚＞桶川宿の一里塚は、日本橋から10番目の一里塚です。明治9年に取り壊されるまで、道の両側に築かれていました。「北一丁目歩道橋」の西詰めに石碑があったというが、現在は歩道橋の柱に一里塚の説明があるようです。

＜上の木戸跡＞木戸の場所を当時の絵図から推測し、木戸跡に石碑が建てられています。



＜北本宿説明板＞鴻巣宿が出来るまではここに鴻巣宿があったが、宿が移され「元鴻巣村」となった。その後「本宿村」に変わり、本宿村の北に「北本宿駅」ができ、村から町に変わる時に、北本宿町とせず「北本町」となった。

＜多聞寺・天神社＞多聞寺は真言宗智山派で万治4年（1661）の開山。本尊は毘沙門天立像（北本の七福神）。蛇・邪悪・鶏・猿の描かれた庚申塔がある。境内のムクロジ（推定樹齢200年）の木は県指定天然記念物である。ちなみにムクロジの果皮をこすり合わせると石鹼のように泡立つ。種は羽根付きの羽根に使われる。



天神社は菅原道真を祀る。寛文2年（1662）頃、名主岡野家が京都の北野天満宮の分霊を勧請して祀ったのが始まりと伝えられている。

＜帰路＞

北本（高崎線）⇒浦和（京浜東北線）⇒南浦和（武蔵野線）⇒新秋津經由
所沢着 17:30 頃予定 以上